◆伊藤洋二　選　　～朝日俳壇より～

（出所：朝日新聞二〇一六年四月二十五日）

働いてきた顔ばかり花見酒　山口耕太郎（名古屋市）

高校の同窓有志による花見会があった。五十年目となる来春の卒業式に招待されるとか。これを機に同窓会を開こうとの「世話人会」でもある。団塊の世代を生き抜いている「友の顔に歴史あり」。懐かしく嬉しいのだ。筆者は、〝クラス出し物〟係に、台本作りが楽しみである。ワクワクが湧く一句。

春愁や宇宙に浮かぶ小さき星　砂原治明（四日市市）

宇宙誕生から一三八億年たった今、私たちはなぜ宇宙に存在するのでしょうか。ノーベル物理学賞の「ニュートリノ振動の発見」がその謎を解く鍵をもつとか。地動説は習ったが未だしっくり来ない。見慣れた山々は今日も動かない。奇跡の星の地に足をつけて俳句を詠む。なんとも長閑かなるメルヘン句。

花吹雪その一片が吾なりし　　二宮正博　（筑紫野市）

島倉千代子さんの「この世の花」♪あかく咲く花　青い花　この世に咲く花数々あれど…。昭和三十年、小学生の頃の愛唱歌。当時は意味不詳のままに大人の世界に憧れたものである。「紆余曲折」「七転八倒」は世の習い。♪…散るもいじらし初恋の花。平和な世に暮らせる有難さに感謝の一句。

まなざしの投網のごとき花見かな　をがはまなぶ（東京都）

石鎚山の麓、燧灘に面し、藩政時代の干拓で生まれた遊水池があります。藩の御漁場でしたが、秋祭り前に「御免打ち」といって開放され、網打ちが許された。上手いお方の投網は、大輪の花が咲き緞帳の開くが如しである。桜が過ぎ藤が見頃となった。鮒の背越しが懐かしい、山水画の美句。

たんぽぽにつまづきこける散歩かな　大川隆夫（大阪市）

足を上げた積りが〝心算〟なのである。ほんの少し習った柔道の「受け身」。顎を引き体を丸め前に一回転するのだが、あくまでも畳の上のお話。散歩中の転倒は一大事になりかねない。黄色は注意信号。踏むまいとて体を崩されたのだろうか。ご用心、ご用心。路傍の花を愛でる優しさ溢れる一句。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

どことなくどこか潤みて春の月　　石橋玲子（枚方市）

潤むとは、「目に涙がにじむ」或いは「涙声になる」との意。春は森羅万象が漲る季節である。漲るとは、水が満ち溢れるほど勢いが盛んになることの意。「氵（さんずい）」で好きな字は、他に「汝」「沌」「洵」「渚」「淵」「澪」漢字万歳！！

老いて学びし老眼の「目に涙」。朧月見て一寸一休み。ほんのり心休む一句。

働いて当然俺と春の土　　額田浩文（八王子市）

「働」は、人が動く＝働くという意で日本独自の漢字「国字」と云うらしい。基本的人権が保障されている一方で、教育、勤労と納税の義務を背負う。春の土といえば「啓蟄」。動植物も土と協働する。当然が意外とならぬよう、「地球丸の一員」として働く。平穏な日々に感謝の一句。

柏餅父は無言で我のこと　　込宮正一（横浜市）

カシワの代わりに、〝しばのは〟（山帰来の葉）で捲く「しばもち」を仏様に供える。父親が筆者と同い年の頃をふと思い出した。ある時、その後の「我人生を決める一言」をぽつりと話してくれた。苦しい時は「心の支え」とし、楽しい時は「酒の友」とした。一言の重み、有難さに心の内で唱える「ありがとう」の句。

◆日根野聖子　選

滑稽俳句協会叢書第一号・「笑って五七五」出版！

九月に、滑稽俳句協会会員の久松久子さんが、句集を出版されました。久松さんは、昭和八年のお生まれで大阪在住。八十二歳の時には大きな手術も受けられ、句集には「麻酔して臨死体験年新た」「鰻割く一気にやつてもらひたし」の句も。どのページのどの句も潔く、溌剌、滑稽、痛快で楽しい。

花見弁当鳩を並べて殿気分

刑務所も造幣局も花吹雪

春泥に杖高跳びの着地かな

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

春眠やどうせ逝くならこのままで

目刺とはいかなる罪ぞ連ねられ

運動は口元ばかり春炬燵

余り苗とかくこの世は運次第

電波の日波長の合はぬ人とをり

丸い地球四角に区切り田水張る

勿体ない勿体ないと黴させる

極楽とはこんなものかや日向ぼこ

Ｇパンの亀裂にもある隙間風

嘘して話の筋を吹き飛ばす

着膨れてもつたいつけて胸診せる

寒紅や入れ歯嵌めれば皺伸びて

八木会長は、俳句の賞の選をする時に、どんな人がこの句を作ったのか、「作者に会いたくなるような俳句」を選ぶと言われます。この句集を読んだ方は、きっと久松さんにお会いしたくなるでしょう。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。